

関口語学からスラヴ語学へ

栗原 成郎

1934 年生まれの私は既に歳には不足のない老人となったが、中等以上の教育は戦後に受けた世代であるため、昭和の 20 年代にはまだ、戦前派（戦中派を含めて）の世代からは否定的な意味合いで“ アブレ・ゲール ” と呼ばれた新しい傾向の若者に属していた。私は昭和 20 年代の終わり近くに東京教育大学（昭和 53 年、筑波大学の創設に伴いその母体となり閉学）の文学部（言語学専攻）に入学した。スラヴ語学を勉強したかったが、北欧語・北欧文学がご専門の若き助教授矢崎源九郎先生の影響でゲルマン語学にも憧れた。

ところが、新制大学が発足して間もないころの当時は、まだ旧制をよしとする雰囲気は大学には濃厚に漂っていた。旧制高校・旧帝大出身の先生方の眼から見れば、新制大学の学生は等し並みに馬鹿であった。

そもそも大学に来てから初めて外国語（英語以外の）を学ぶということ自体がおかしい。Philologie を専攻するなら尚更だ。第二外国語は大学以前の旧制高校なり予科でしっかり勉強しておくべきものである。旧制高校のカリキュラムでは授業時間の半分以上が語学教育に当てられていて、学生はほぼ毎日ドイツ語かフランス語の原書を読み、学生の教養の程度は読んだ原書の量で測られた。新制高校ではそのような教育は望むべくもなく、英語の読解力すら怪しい。

このような知的雰囲気の中にあって語学力の乏しい学生は有形無形の圧力を受けた。新制大学の第二外国語（私の場合はドイツ語）の授業は週 2 コマであり、この程度の時間数の勉強では語学力が身につかないことは自分でも分かっていた。私は旧制高校的教養主義が嫌いではなかった。むしろ語学漬けの生活がしてみたかった。そこで夜学の語学校へ

通うことを考えた。

そのころ山手線の高田馬場駅のプラットフォームから“高田外語”という文字看板のある白い建物が見えていた。英語学者の蒔田栄一先生が校長を務めていた予備校兼外国語学校だった。関口存男先生が出講しておられるのを知った。しかし関口先生の初級クラスはなかった。初級ドイツ語には藤田五郎先生の夏期講座があったので、早速そこにとびこんだ。昭和 29 年の夏だった。教科書は関口先生著『急就小独逸文法』（昭和 26 年、三修社）。授業は藤田先生の独演だったが、汗を拭き拭き熱心に教えてくださり、良く頭にはいって楽しかった。『急就小独逸文法』はコンパクトな良書だった。それを勉強嫌いな従弟に貸してやったのが運のつき、なくされてしまった。

この初級文法速修コースが終わったあとは、江沢建之助先生の講読のコースに入った。江沢先生はまだお若い白面の貴公子で、慶應義塾大学講師の肩書きだった。関口存男先生の語学に傾倒しておられるように、お見受けした。江沢先生の最初の教材は自ら編まれた『旧約聖書物語』で「ノアの箱舟」の動物をデザインした赤い表紙の教科書だったが、この本も失われた。次の学期にはリルケの『マルテの手記』の講読が行われた。ドイツ語が面白くなってきた。

次の学期（昭和 31 年だった、と思う）念願かなってようやく関口存男先生のクラスに出ることができた。講読と独作文の二つのクラスがあった。独作文はむずかしそうだったので、次の学期に習うことにして講読クラスに出た。教科書はカフカの『流刑地にて』であった。関口先生は瘦身、眼光炯炯、お声は少ししわがれてはいるが、きびきびとした張りのある口調で講読の講義を始められた。めりはりの利いた音読と懇切丁寧な解釈・説明にすっかり魅せられた。ドイツ語と英語・フランス語・ラテン語との比較対照が何の銜いもなくぼんぼんとび出した。名人芸と言ってよい講義だった。Watte という単語が出てくると、「これは日本語の綿に似ているが、語源が同じなのではなく、アラビア語 batn が起源、ロシア語では vata と言い、もっと日本語に似てくるが、こちらはドイツ語からの借用」といった調子。「この文章はジャーナリストの文体です」というふうなコメント。白状すると、この時に取ったメモ、書き込みをした教科書を種にして語学エッセイを書くつもりでいたの

だが、度重なる引越しと蔵書やノートの散在のため、締切期限までに必要ものを探し出せなかった。曖昧な記憶に頼っている。このカフカ講読のあと関口先生の高田外語への出講はなくなり、先生は昭和 33 年夏急逝された。独作文はついに習うことができなかった。

こうして、私は大学と高田外語の二箇所でのドイツ語学習によってドイツ語に親しみを覚えたが、昔の旧制高校の学生のように、レクラム文庫を片っ端から読むような力はまだついていなかった。それで次の勉強のために、ご著作を辿って関口先生の後姿を追うことにした。

文法書はもちろん興味深かったが、最も好きなのは、先生による文学作品の訳読と註解であった。古本屋で買った端本の『獨逸語大講座』(第五巻)中のヘルマン・ヘッセ『アウグストゥス *Augustus*』(訳文は荒木茂雄)も秀逸だが、『ファオスト抄 *Aus Goethes „Faust“*』(昭和 16 年、三修社)と『シラー・海に潜る若者 *Der Taucher*』(昭和 44 年、三修社)は関口存男先生の訳読・註解の白眉であり、次の点で大きな刺戟と測り知れない恩恵を受けた。

- (1) 作品テキストの一言半句をもおろそかにしない文法的分析と徹底的な逐語訳。
- (2) この然るべき手順を経たのち、もはや原文のドイツ語に無理な義理立てをせずに、悠然と練り上げ、磨き上げた訳文。
- (3) 単なる語学ではない、文学研究としての作品解釈と鑑賞。
- (4) 諧謔精神に富んだ講談調の語り口による解説。(先生独特の脱線は無駄な脱線にあらず、話の起承転結の『転』に当たる必要な脱線。)

私はドイツ語学習ののちにロシア語その他のスラヴ語の研究を始め、細々と今日に至っているが、関口方式のテキスト読みを常に導きの星と仰いできた。

『獨逸語大講座』の第六巻の開巻冒頭には忘れがたい関口語録が記されている。

(中略)私も、さう何時までも初歩ばかりやつてゐるのは御免だから、何等かの道を通じて、此の講座を讀んで初歩を固められた

人々と一緒に上へ進んで行きたい。けれども、私の主義とするところは、今後と雖もさうは變らないでせう。大抵もううんざりなすつたでせうが、一寸エピロ グとして繰りかへしておく

- (1) 文法には統一あらざるべからず。
- (2) 先づ馬鹿の一つ覚えをしる。
- (3) 容易な文例を澤山讀め。
- (4) 逐語譯によれ。
- (5) 音讀しる。
- (6) 中腰でやる位なら止せ。
- (7) 文法上の概念と術語とはつきり意識しる。理屈に負けるな。
- (8) 原書を引きながら辭書を讀め。
- (9) 言は事なり。
- (10) 歐州人種の概念形態に興味を持て¹。

今まで誰にも告白したことはなかったが、私のスラヴ語研究の原点はここにある。

(くりはら しげお 東京大学名誉教授・創価大学教授 スラヴ文献学)

КУРИХАРА, Сигэо: Языкознание германиста профессора Ц. Сэкигучи как проводник в славяноведение.

¹ 関口存男監修 『獨逸語大講座』第六卷(外国語研究社、昭和6年); 『関口存男生誕100周年記念著作集 ドイツ語学篇』7(三修社、平成6年): 199 - 200頁。